



(第1図)

(2) 天神山城図 (第1図)

年代 戦国時代
 寸法 26.6×34.4
 所蔵 高山市教育委員会

天神山城図は飛州志(註2)に所収されているが、高山市教育委員会所蔵の飛州志に掲載されているものをここに掲載する。

第1図は押上家から寄贈された飛州志の挿図で、江名子川、宮川がしっかり描かれ、本丸、三之丸への点線の道路が描かれる。写真1の航空写真と縄張りの形が対応している。

現在の城山公園は、金森氏が築いた高山城の縄張を主体とする。金森氏以前の時代は、天神山城といい、日枝神社の裏山が三之丸、金竜ヶ丘が二之丸、金森時代の本丸が本丸であった。文安年中(1444～1449)、飛騨の守護代であった「多賀出雲守徳言」によって築城され、近江の多賀天神を祀ったことから「多賀天神山」、城は「多賀山城」と呼ばれたという。永正年間(1505～1520)には高山外記(げき)が在城し、その時も「天神山城」と呼ばれていた。

多賀氏は守護京極家の守護代で、高山氏はその後の守護の被官である。

中世における守護は、岩松経家(元弘3年・1333)、佐々木道誉(延文4年・1359)が補任(ぶにん)されている。この佐々木氏は、六角家と京極家に分かれ、京極持清の代には六角家をしのぐ勢いとなって多賀氏を飛騨の守護代

として派遣している。しかし、京極家は内紛が起り、また、六角氏との争いが同族の中であって没落をする。その中で、飛騨の京極家の被官は争いに巻き込まれず、勢力を伸ばすことになる。高山外記や三木氏は、この例である。

第1図で、東に江名子川、西に宮川が描かれている。江名子川は当時、現在の北山公園山麓の縁を北流していたのだが、川の流路位置は金森氏による江名子川改修後の姿に近くなっている。高山国府は二重丸で描かれ、宮川上流には古橋跡が記される。この橋は、絵図の配置からすると和合橋あたりと思われる。

前述した天神山城の本丸一帯は、金森氏による城郭縄張りでその部分に本丸、二之丸、三之丸が構築された。天神山城の二之丸部分は昔、花見がよくされた金竜ヶ丘である。天神山城の三之丸部分は日枝神社の裏山で、頂部が平坦になっている部分が現存する。城郭全体に掘り切り、空堀群等はまだ確認されていないが、金森氏の本丸中段屋形（註3）部分から北方向に深いタテ堀が存在する。金森時代のものとは思われなく、天神山城時代のものとも考えられる。高山国府の位置は、安川村（安川通）の位置であろう。

（註2） 長谷川忠崇著『飛州志（誤字脱行訂正版）』編・解説岡村利平、活字原本発行者住広造、
明治42年6月28日発行〈昭和44年、岐阜県郷土資料刊行会刊行〉

（註3） 高山市教育委員会編『高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』昭和63年高山市教育委員会発行、26頁

※掲載されている情報（文章、写真など）は、著作権法上認められた例外を除き、高山市教育委員会に無断で複製・引用・転用・転載などの利用をすることはできません。